

## 8月22日「見えない希望」マタイ福音書13：24～43

イエスは神の国について（マタイでは「天の国」マタイは「神」という言葉を使うことに抵抗があったようです）色々な譬えを用いて語られました。今日のところでは、からしだねやパン種のように本当に小さなものから成長すると何十倍にも膨れ上がると言われています。他にも、神の国は宴会のようだ。一番小さな子どもが最も尊重されるようなものだ、皆が一律の給料をもらえるブドウ園のようだ、などなど本当に様々です。色々な言い方をされると私たちはついどれが本当に正解なのか一つを選びたくなりますが、そんな必要はありません。しいて言えば全部が正解だからです。神の国はあまりに素晴らしすぎて、地上のどんな言葉をもってしても直接説明することが不可能なのです。だからイエスは色んな側面から、いろいろな譬えで神の国について語られたのでした。

さて、今日はそんな譬えの一つ、毒麦の譬えを聴いてみました。ある人が畑に麦の種を蒔きました。とても質の良い種です。僕たちと協力してたくさんの実りを願って蒔きました。ところが、そこに敵がやってきて毒麦が混ぜられてしまいました。毒麦とは通称「ネズミムギ」のことで、黒い小さな粒で小麦の親戚らしいのですが、毒性が強く、そのムギが大量に含まれたパンを食べると失明したり、死に至ることもあるそうです。古代のイスラエルの農民たちは、その危険性と見分け方をよく知っていました。大体は収穫までに1～2回は畑を回って、引き抜いておくことをしたそうです。僕たちは、少しでも主人の役に立ちたいものですから「行って抜き集めておきましょうか？」と尋ねます。ところが主人は驚くようなことを言います。「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。借り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」確かに、毒麦の根は良く周りの麦の根と絡むので、それを引き抜くときに他の良い麦を引き抜いてしまう可能性はあったようです。それにしたって、収穫した後に選り分ける手間とリスクを考えれば、収穫前に引き抜いておく方がよっぽど効率的で、安全です！それにも関わらず、主人は良い麦も毒麦も一緒に育てるようにと言われるのです。なんて極端で変わった主人なのでしょう！？で

もイエスは言うのです。それが神の国だ。それが、神様の在り方なんだと。

さて、この譬えをどう受け取ればよいのでしょうか？ 36節以下にイエスがなされたと言われる説明があります。「**良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである・・・**」  
どうやら私たちに毒麦とはならないように、良い麦であるようにということを伝える譬えであるように思えます。但し、この説明を、多くの研究者はイエス本人が語られたものではないと考えられています。譬えは少し意味が取り辛い面があるためにマタイの著者が付け足した補足だと。私もそのように受け止めて、今日はこの説明とは少し違う受け取り方をしました。私たちは「麦」よりも「僕」たちの立場に近いのではないかということです。つまり「毒麦が入った！すぐに出して良い麦だけにしなくっちゃ！」  
こう考えがちではないかということです。

例えば、私は一児の親で、保育園で子どもたちに指導的な立場にあります。そうすると、子どもたちの悪いところが目につくと、それを何とか矯正してやりたい、正してやりたい気持ちになってしまいます。本来、教育というのは悪い面よりも子どもたちの良い部分に目を留めて「素敵だね、素晴らしいね」と伸ばしてやるものだと分かっているのですが、「悪い芽は早いうちに摘んでおきたい」そんな気持ちが先行してしまうことがあるのです。皆さんにもそういう経験ないでしょうか？

「毒麦はさっさと抜いてしまおう」これは私たちの本質的な罪の姿すらも含んだあり方です。先日、木曜日の祈祷会で「罪」の話になったときにこんな質問が出ました。「先日、オリンピックの開会式の責任者（小林賢太郎氏）が解任された。その前の、障害のある同級生をいじめていた人（小山田圭吾氏）ならまあわかるけれども、この人はすでに反省もしていて、過去のことなのに、今さらそんなに大きな問題なのかと思った・・・罪は過去のことでも反省していても赦されないのですか？」なるほど、とても良い質問ですし、今日の譬えを考えるのに良い材料だと思ったので、改めて

お話しします。まず、知らない方のために・・・オリンピックの開会式の責任者である小林健太郎氏が過去にテレビでナチスのホロコーストを揶揄したコメディ(笑い話)を作ったことが原因で解任されることがありました。このことについて、佐藤優氏(同志社神学部卒、外交官)が解説しておりましたが、ホロコーストを揶揄するなど、ドイツであれば刑事事件として立件されて逮捕されるほどの重罪です。また、ナチスの事件については、時効はありません。戦後76年経ちますが、関係者は今でも裁かれます。それほど、ナチスによって行われた事柄は単なる戦争犯罪(つまり敵を殺すこと)を超えた恐ろしい出来事だと受け止められているのです。

どうして、ナチスのホロコーストがそれほど「恐ろしい出来事」だと考えられるのか・・・日本だと「アンネの日記」とか「命のビザ(杉原千畝氏)」などユダヤ人だけが犠牲になった可哀そうな出来事のイメージが強いように思いますが、他にも、身体的・精神的に障害を持つ人たちや、ジプシーなどのユダヤ人以外の少数民族など、つまり社会的な少数派や弱者を、何の罪も犯していない人たちを、一方的なナチスの基準によって、排除したのがホロコーストなのです。生きて良い者と、生きてはいけない者、そういう風に命の選別がなされ、無いとされた方は問答無用で命を奪われたのです。これは、本当に恐ろしいことです。同時に、私たちの社会の基本的な価値観そのものへの挑戦です。私たちは「すべての人は平等で皆に生きる権利がある」ということを前提に、すべての人に選挙権や基本的な人権のある「民主主義」社会に生きています。だから、これは、単に過去に起きた悲しい出来事では片づけられないのです。過去ではなく、「今」の問題だからです。

「すべての人の命に価値がある。皆に生きる権利がある」この価値観の根底には、聖書があると思います。神さまがこの世界を創造された時に何といわれたのか? 「良い」と言われた。失敗作は一つもなかった。すべてが「極めて良かった」だから、私たちはすべての命には価値があって、生きる権利があると信じています。女性も、男性も、性的マイノリティも。身体が元気に動く人も、病気の人、障害のある人も。金持ちも、そうで

ない人も。弱い人も強い人も。肌の色や目の色や話す言葉は関係なく、すべての命は祝福されていて、神さまから与えられた命を喜んで生きる権利があると信じています。

残念ながら、私たちの社会にはこの価値観が浸透しているとは到底思えません。つい先日、テレビやYouTubeで若い人たちから有名なDaiGoという方が「ホームレスの命はどうでもいい」「生活保護の人たちにお金を払うために税金を納めているのではない」などと発言して大きな問題となりました。彼は「命には優劣がある」とはっきり言ったのです。彼は軽い気持ちで語ったのかもしれないですが、これを突き詰めた先にはナチスのホロコーストがあり、実際に日本でも、路上で生活していた女性が蹴り殺されたり、相模原の障がい者施設が襲撃されたり、ホームレスの方に石を投げつけて命を奪ってしまう中学生がいたりするのです。彼は、九州でホームレス支援をされている奥田知志牧師に教えを受けて、学び直すそうですが、その機会が良いものとなるように願っています。

しかし、彼だけを批判すれば良いというものではありません。異質なモノを認めない。間違いを見つけたら排除したい。これは私たちにとって抗いがたい誘惑であり、人間の罪の本質そのものだからです。DaiGo氏を批判するインターネット上の声にこんなものもありました「そんな酷いことを言うお前が社会には不要だ！」・・・そう言ってしまえば、DaiGo氏の発言とあまり変わらないのです。

神さまが造られたすべての命は祝福されている。すべての人はその命を喜んで生きる権利がある。私たちはこのことを聖書から教えられ知っているはずです。にもかかわらず、毒麦は早いうちについつい抜きたくなり、誰かの罪にばかり目が行き、他人の目のおがくずは気になるのに、自分の目の丸太には気づきません。そんな私たちにイエスは言われるのです。愛し合いなさい。赦し合いなさい。神の国というのは、良い麦と毒麦が一緒に育てられる場所なのだよ！主イエスの譬えが私たちに迫ってくるように思います。